

Interview

取材・文 中東生

Text Shinobu Naka

テオドール・クルレンツィス ロシアでのミッションを語る

――すでに「ロシア」を代表する指揮者に

「鬼才(「奇才」という言葉がぴったりな指揮者クルレンツィス。近年、注目度がめきめきと上がってきているが、ギリシア人の彼は、サンクトペテルブルクでムーシンに師事し、現在の本拠地はロシア、それも中央から遠く離れたウラル山脈の麓の街ベルミだ。それ以前はシベリアのノヴォシビルスクの歌劇場のシェフを務めていた。もはや「ロシアの指揮者」にカテゴライズしても差し支えないように思えるほどだ。クルレンツィスは「ミッション」という言葉をよく使うが、その彼に、「ロシアでのミッション」を語ってもらった。

ロシアを選んだ「奇才」

芸術家の宝庫ロシアに、単身乗り込んで世界を変えようとしている男がいる。ギリシア生まれのテオドール・クルレンツィスである。「ギリシア人」と書くこととして抵抗を覚えるほど、彼はロシアに溶け込んで活動している。「ギリシア人奏者とも英語で話しているから、実はギリシア語は話せないのではないか」という噂がたつほどだ。常に「仲間」に取り囲まれているように見える彼が、インタヴューでは奇才であるが故に、常に取り憑かれている孤独について憂いていた。

ヘルミを世界の音楽の首都にするのが
私のミッションです



Teodor Currentzis
speaks
about his mission
in the Russia.

着々とロシアにおける「ミッション」を遂行しているクルレンツィス。ロシア正教会の敬虔な信者でもある ©Dmitrii Dubinsky.

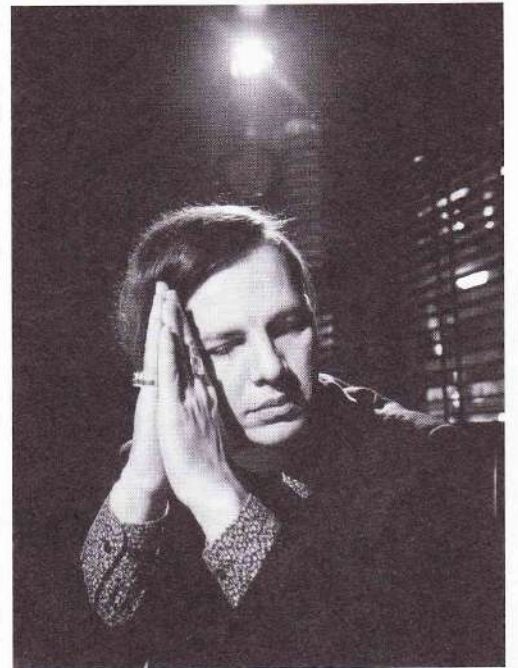
だからこそ故郷の匂いを持たないのかも
 しない。

クルレンツィスがロシアを選んだのは、イリヤ・ムーシニンに師事するため、当然の選択のように語る。その後、2004年にノヴォシビルスク国立歌劇場音楽監督に就任し、ロシアを中心に世界から引き抜いた優秀な奏者を集めてムジカ・エテルナを結成する。真夜中に、満足がいくまで何度も繰り返し、いつまでも続くレコーディング・セッションを経て、数々の名録音を生み出した。パーセル《デイドとエネアス》などのバロックに始まり、モーツァルトのダ・ポンテ三部作は完成したばかりで、《フィガロの結婚》ではドイツのレコード大賞であるエコー・クラシック賞を受賞している。

ノヴォシビルスクからベルミへ

そんな彼にベルミの歌劇場が目をつけたのは、バレエ・リュスなどの名興行師として知られるディアギレフの先見の明を受け継いだ土地柄なのだろうか。ウラル山脈の麓にある無名に近い街ベルミにクルレンツィスは、「自分の仲間のムジカ・エテルナを同伴できるなら」と条件をつけた。結局ベルミ側は彼の意向を受け入れ、ベルミ国立オペラ・バレエ劇場の芸術監督になったため、今でもノヴォシビルスクでは、「クルレンツィスを取られた」という意識が残っているように感じられる。

しかし、クルレンツィスは壮大なミッションを遂行するために着々と階段を昇



テオドール・クルレンツィス Teodor Currentzis
 1972年、ギリシアのアテネ生まれ。1994年、サンクトペテルブルク音楽院でイリヤ・ムーシニンに指揮法を師事。サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団でユーリ・テミルカーノフのアシスタントを務め、2004年、ノヴォシビルスク国立歌劇場の音楽監督に就任、同年アンサンブル・ムジカエテルナおよびムジカエテルナ室内合唱団を創設して芸術監督となる。2011年、ベルミ国立オペラ・バレエ劇場の芸術監督に就任。近年最も注目されている指揮者のひとり ©Vladimir Yarotsky

っていたのだ。

「音楽の生命をリノベ이션すること
 が私にとって大切なのですが、音楽を通して語ることに真実が含まれていなければ、聴く人はもちろん信じてことができず、音楽は機能しません。そのような音楽のシステムを改革しなければならぬのです。オーケストラには優秀な人材が集められていても、常に時計を見ながら弾いているような状況なのです。『オペラとは何たるものか』というジョークをご存知ですか？『7時に始まって、3時間経ったと思つて時計を見たら、7時15分だったというものだ』(大爆笑)という状況である現在の音楽界に、人間的な革命を起こすのが私の使命です。しかしそのためには、存在している枠組みをすべて破壊して、1から教育システムも含めて再構築しなければなりません。でも、音楽の中心地から離れている何もない所から新しく興せば、破壊しなくて済むの

です。私にとつての改革とは、音楽をコミュニケーションツールとしての言語のように機能させることです。今までの5年間で改革の基礎はできたので、次の5年間で、私のような考えを持っている音楽家を世界中から集めてくるのが目標です。そして例えば医者や、ピタミンが欠けているからと処方したり、喫煙者には何かを補充したりするように、例えばどこかで素晴らしいネットサンス音楽を聴いたら、ベルミに連れてきたり、別の欠けているエッセンスも補つたりしながら、独自の世界を創造し、彼らと共に作りあげた音楽を聴きに多くの聴衆がベルミに来る。ベルミから新しい潮流を発信し、ベルミを世界の音楽の首都にするのが私のミッションです」

ベルミ市民の意識革命

力強く語るクルレンツィスは、すでに彼の発信する音楽を聴くためにベルミに

移住してきた聴衆に、少なからず出会っているという。恐るべき実行力である。

今年の第11回ディアギレフ・フェスティバルでは、干渉から自由になり、本当に自分たちがやりたい企画だけを選ぶ権限も得られるようになったと満足気だ。特に子供の教育に重点を置くのは、将来の音楽界を担う「正しい耳」を育てているのだろう。また、現地の若者をボランティアとして登録させているのも興味深い。フェスティバル期間中、空港への送り迎えやトラブル処理、取材の通訳から街のガイドまで、必要な言語を操れる若者が登録されているようで、欲びと誇りを持って対応してくれる。音楽とは無縁な大学生から帰国子女のOL、大学教員まで従事しているが、彼らは音楽に目覚め、そして外国へ夢を馳せながら、多くの外国人をベルミに招き入れる手伝いをしている。ベルミ市民の意識革命だ。

今年の夏には、ムジカ・エテルナをザルツブルク音楽祭にデビューさせ、好評を博した。

リツカルド・ムーティの指揮する、ネトレブコヴェルディ《アイーダ》のアイーダ役へのデビューという豪華演目と並んで、「チケット入手が不可能に近い2演目」と称されていた。それによって、世界から集まるザルツブルク音楽祭の聴衆が、ベルミに彼らを聴きに行くようになるだろう。こうしてクルレンツィスのミッションが完遂したとき、ロシアが、そして世界の音楽界はどのようになっていくのだろうか。